

房総の 文化財

ISSN 0910-0848
Bōsō no bunkazai

VOL. 7

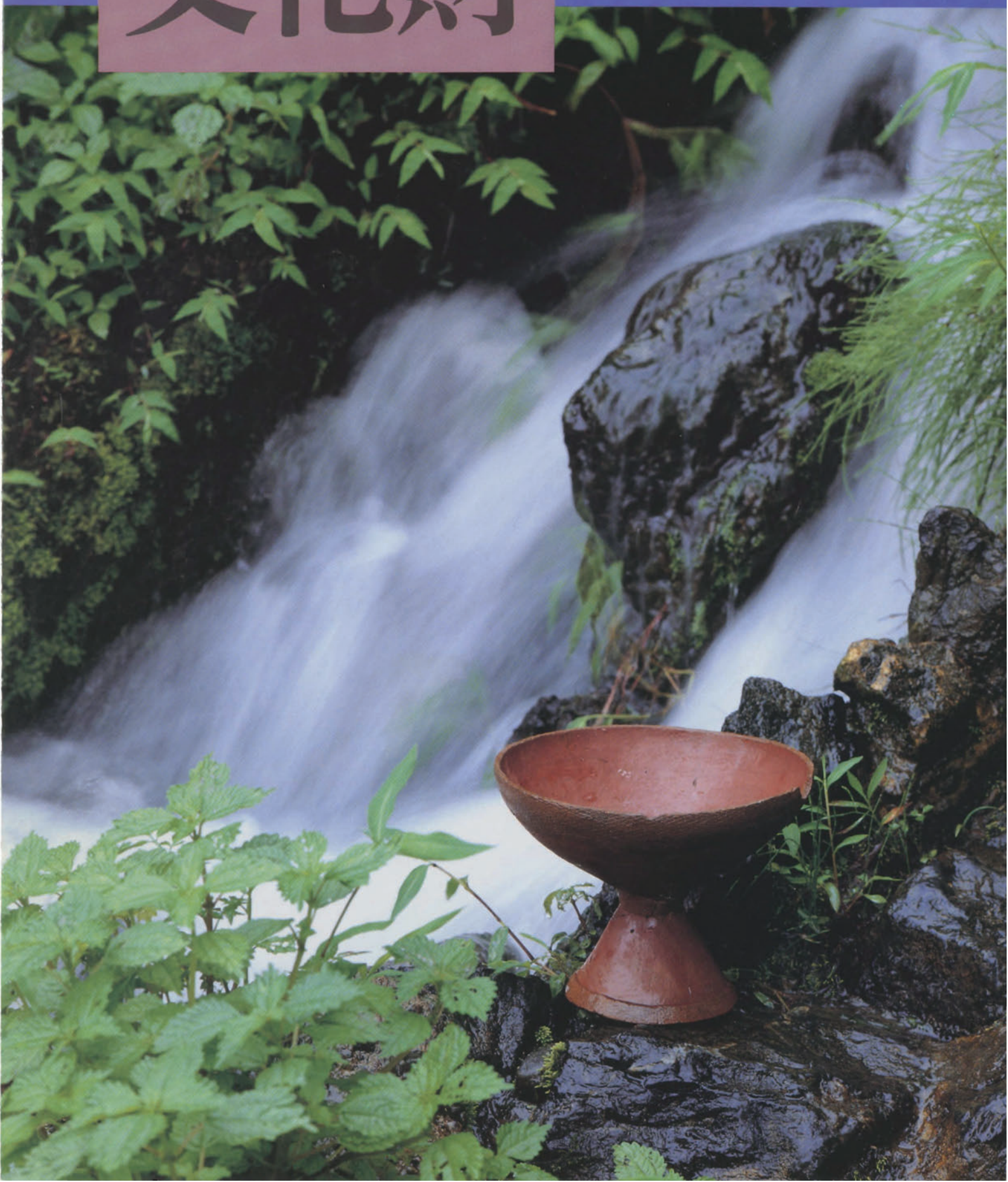
平成 7 年 7 月 31 日

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代)

FAX 043-422-8850



「大昔の占い道具が見つかる」市原市草刈遺跡



草刈遺跡で見つかったト骨

(撮影・堀越知道)

市原市にある草刈遺跡の弥生時代の住居跡から、「ト骨」が2点見つかりました。ト骨とは、古くに用いた骨のことで、獣の骨や亀の甲羅に火熱を加えて、そのひび割れの状態や骨の色の変わり方を見て吉凶(よいこととわるいこと)を占った道具のことを言います。

弥生時代のト骨は、日本で今のところ90点以上見つっています。西は長崎県から、東は千葉県まで分布しています。千葉県内では、草刈遺跡のほかに千葉市の城の腰遺跡と市原市の菊間遺跡で合計6点見つっています。

この時代のト骨の多くは、シカやイノシシの成獣の肩胛骨が使われています。これは意識的に選んでいたようです。草刈遺跡で見つかったト骨のうち一つはシカの成獣の肩胛骨で、もう一つは1歳位のシカの寛骨(腰の部分の骨)でした。寛骨を使ったものは非常に珍しく、東京都の向ヶ岡遺跡に次ぐ2例目の発見です。

ト骨の多くは、貝塚など、獣の骨が腐らずに残りやすい条件が備わったところから見つっています。草刈遺跡で見つかったト骨も、住居内に捨てられた貝殻



ト骨が見つかった弥生時代の住居跡

の中から出てきました。

ト骨については、中国の史書である『魏書』や日本の『古事記』『日本書紀』『万葉集』などに記されています。『魏志倭人伝』には、「日本では、何か重要なことを行う時には、骨を焼いて、その焼け方で吉凶を占う。」という内容のことが書かれています。これが書かれた年代を考えると、この内容は、弥生時代の日本の風習を示していると言えます。

現代でも群馬県富岡市の貫前神社や東京都青梅市の御嶽神社などでは、シカの肩胛骨を使って火災の危険度や農作物の作柄を占うことが神事として行われています。(岩谷)

おれたちは猿じゃない! ~旧石器時代人の知恵~

遠くで噴火する火山と荒涼とした平原、そこで象を追いかけてまわっている人間とも猿とも見わけのつかない生き物。「旧石器時代」と聞くと、ほとんどの人はこんな園山俊二の漫画のような風景を思い浮かべるのではないのでしょうか。

人類の登場(今から200万年前)から1万年くらい前までの、気の遠くなるような長い時代を、考古学の上では旧石器時代と呼んでいます。この時代には、世界規模の火山の噴火がしばしば起こり、上空に舞い上がった火山灰によって太陽の光はさえぎられ、日本の平均気温は今より6度も低かったと言われています。いわゆる氷河期にあたります。

火山の噴火が気候に影響をあたえた例として、昭和55年(1980年)のアメリカ合衆国ワシントン州のセントヘレンズ火山の噴火があげられます。このときは日本でも記録的な冷夏となったことは記憶に新しいところです。また古くは、天明3年(1783年)の浅間山の噴火が「天明のききん」をひきおこし、そのため「天明のうちこわし」という歴史的大事件がおこっています。

話を旧石器時代にもどしましょう。私たちの住んでいる千葉県では、旧石器時代の終末期にあたる3万年前から1万2千年前の石器が見つっています。この時代の遺跡は火山灰が降りつもった関東ローム層の中に埋まっているため、石器以外の木や皮はすべて腐って残っていません。ですから私たちは、旧石器時代人の生活のようすを石器の観察を通して考えるしかありませんが、石器はじつに多くのことを教えてくれます。

千葉県の旧石器時代を代表する石器としてナイフ形石器、槍先形尖頭器、そして小さなカミソリの刃のような形をした細石刃があげられます。この中でも飛躍的に進歩した石器が槍先形尖頭器です。槍先形尖頭器は見てわかるように、きれいな流線型をしていて、いかにも「飛ぶ」という感じがします。そう、これは棒の先につけて投げ、獣をとる投げやりなのです。こんなもので獣がとれるのかと思うかもしれませんが、そこは旧石器時代人の生きるか死ぬかの問題、さまざまなくふうをしているのです。

当時の獲物だった鹿やイノシシなどは皮が厚いため、ただとがっているだけでは刺さりにくく、刺さっても死ぬほどの傷をつけることはできません。しかし、槍先形尖頭器はとがっていて幅も広いため、刺さってしかも切れるのです。また投げるときに回転させたと考えられ、回転させることによってより大きな傷をつけることができ、やり自体もまっすぐに飛び命中率を上げることができました。

このように旧石器時代人は知恵をばって生きていたのです。

どうですか?『旧石器時代』と聞いて思いうかべる情景が、すこし変わってきたのではないのでしょうか。(落合)



槍先形尖頭器

とんがり底の縄文土器

今回紹介する遺物は、成田空港内のいくつかの遺跡から見つかった縄文土器です。

土器の表面には、撚糸文(円棒に撚紐を巻きつけたものを回転して付けられた文様)や沈線文(ヘラなどで線を引いた文様)がえがかれています。縄文土器の中ではシンプルな美しさをもった土器と言えます。

底の形はすべて尖っていたり丸くなっていたり、これでは、ただ単に地面に置いただけではたおれてしまいます。おそらく、地面に穴をあけたり、土器のまわりに石を置いて立たせたのでしょう。

これらは、縄文時代早期(約1万年前)のもので、木の実などを煮て食べるのに使われました。

(横山)



(撮影・堀越知道)

縄文早期の土器(成田空港内の遺跡)

去る5月13日、千葉ニュータウンの一角にある平安時代の村の跡—船尾白幡遺跡—で見学会を開いたところ、何と230人もの方々が参加されました。この時『土器はどこで作ったの?』とか「トイレはどうしていたの?」といったたくさんの質問が出て、私たちも一緒になって考えこんでしまいました。ここで一つだけ紹介してみましょう。

Q 人間はなぜ地面を掘って住むことを思いついたのかな? いつごろから?

A これはむずかしい質問ですね……ヨーロッパなどでは、石器時代、洞窟や岩陰などに暮らした跡がありますが、日本ではあまり見られません。縄文時代のはじめごろはまだかなり寒い時代でした。そこで「冬の寒さや積雪にも耐える北方的住居」(佐原眞『岩波講座日本考古学4』1986から)、つまり地面を掘って屋根を低くし、地面にまで葺きおろすような住居を考えたのではないのでしょうか。これが「竪穴住居」といわれるものです。みなさんも経験がおありと思いますが、地下室って意外と冬は暖かく、夏はすずしいものですね。

ではいつごろこうした住居が生まれたのでしょうか。

北九州のある遺跡では旧石器時代の竪穴が見つかってい

ますが、常にそこで生活していたかどうかははっきりしません。一般的にはある程度食料が安定して確保でき、定住生活ができるようになる縄文時代からと考えられています。

上から見た竪穴の形は、縄文時代は四角形や円形、弥生時代では楕円形、古墳時代以降は方形が基本となります。私たちの発掘調査では、上屋(屋根や壁)の構造はなかなか明らかにできないのですが、こうした竪穴の形の変化から、円錐形のテントのようなものから、次第に棟を持ったものへ変化していったと推定されます。

『万葉集』のなかにも「伏廬」という言葉が出てきますが、まさに当時(奈良時代)の竪穴住居のありさまをうまく表現した言葉と言えます。

千葉県では、竪穴住居は平安時代の途中(10世紀ころ)まで盛んにつくられましたが、その後急速

につくられなくなったことがわかっています。

まだまだ謎に包まれた古代の住まい……発掘調査によって、すこしずつですがそのすがたが見えてきたようです。

(猪股)



竪穴住居

新役員の御紹介

本年の人事異動で、当センターの役員が変わりましたので、お知らせいたします。

理事長—中村好成(千葉県教育委員会教育長)

副理事長—佐藤仁美(前・財団法人千葉県社会教育施設管理財団副理事長)

常務理事—白石竹雄(前・財団法人千葉県社会教育施設管理財団常務理事)

理事—酒井文雄(元・千葉県水道事業管理者水道局長)

表紙の説明

弥生時代の高杯(たかつき)

市原市草刈遺跡出土

高杯は、弥生時代以降使われるようになった土器で、食物などを盛るためのうつわです。

撮影：堀越知道

お知らせ

出土遺物展

「武士遺跡展-夏休み! 出かけませんか縄文の世界へ」

期間:平成7年8月19日(土)~8月27日(日)

午前9時から午後5時まで

場所:市原市五井会館4階大ホール

JR内房線五井駅下車3分

入場料:無料

編集後記

今年度から本紙はB5判からA4判になりましたので、これを機会に紙面の構成を変えてみました。

大事なのは、ひとりでも多くの方に難解な考古学の世界への興味と理解をもってもらうことです。

本紙は、一般の人々の世界と考古学の世界をつなぐ数少ない架け橋のひとつだと思います。

今後も、一般の人々が何を知らたがっているのかを考えながら、紙面の充実をはかっていきたいと思っています。(S.S)